

〈研究論文〉

和歌(短歌)の表現技法

万葉和歌(短歌)の2句単位を支えた枕詞・序詞

(古典和歌研究者) 浅岡 純朗

Art of description in the WAKA (Japanese thirty-one syllabled poems): A study on the interrelation between noun endings and forth phrase endings

..... ASAOKA SUMIAKI



はじめに

(一) 和歌から短歌へ

谷山茂氏によれば、歴史の実態としての短歌の歌体は、「短歌(5・7・5・7・7・)を中心に、長歌(5・7・5・7・7・)、旋頭歌(5・7・7・5・7・7・)、片歌(5・7・7・)、その他(5・7・5・7・7・7・7・)は石歌(の範囲に限られる。(中略)短歌という名称が和歌に取って代わるのは、明治の和歌革新運動以後である。それ以後は和歌といふことは古典和歌にのみ通用し、近現代の和歌は短歌とよばれる。」(注1)とある。

(二) 2句単位から句単位へ

和歌における歌体の変遷や歌風の展開をたどっていくと、「5・7音の繰り返しを減少させようとする衝動」が通底していて、これら一つには長歌形式から短歌形式への流れを、二つには短歌形式の和歌における2句単位(二句切れ、四句切れ)から句単位(初句切れ、三句切れ)への流れを形成した、と考えられる。

(三) 表現技法としての枕詞・序詞

① 枕詞(まくらことば)は、ふつう

「五音からなる。ある語句の直前に置いて、声調を整えたり、印象を強めたり、その語句に具体的なイメージを与えたりする技法。特定の語句に特定の枕詞がかかるという固定性が強い」(注2)、とされる。かかり方は、同音繰り返しのように語音によるもの、同音異義のように語音・語義双方にまたがるもの、比喩のように語義によるもの、の3種類がある。歴史的には、語音によるものは文字がなかった古代歌謡時代の痕跡を、語義によるものは漢字や万葉仮名など文字を受容した以後の時代の技法上の発展を、それぞれ担保していると考えられる。

② 序詞(じよことば)は、

「ある語句に具体的なイメージを与える技法。七音以上の長さで、作者の独創による詞句である点が枕詞とは異なる」(注2)。その働きは、枕詞とほぼ同じで、枕詞を含んで構成される序詞も少なく

ない。序詞が起こす詞句についても、語音によるもの、語音・語義双方にまたがるもの、語義によるものの 3 種類を列挙することができ
る。

四 枕詞・序詞と句切れとの関係

万葉和歌(短歌)を「句の切れ続きの集合」として認識すると、句の切れ(切れ目)は句切れという表現技法が担い、句の続き(つなぎ目)の一端は枕詞という表現技法が担っていることは明らかであるが、両者の間にどのような関係が存在するか。また、修辞としての働きや性格に違いがないとされる序詞についてはどうか。この論文では、「枕詞・序詞」をひとまとめにして、「句切れ」との関係を明らかにしようとした。

(句切れの定義)

複数の文からなる短歌で、結句(第五句)以外の何句目で文が終わっているかを示すもの。その位置によって、初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れという。『万葉集』の時代は二句切れ・四句切れが、『古今和歌集』の時代は三句切れが、『新古今和歌集』の時代は初句切れ・三句切れが比較的多い。(注 2)

一 万葉和歌(短歌)に見られる枕詞・序詞

(一) 枕詞の類歌

分類上の整理とも言えるが、和歌(短歌)の五音の句は、初句及

び第三句に限られる。「はじめに」の(三)①で述べたように、「特定の語句に特定の枕詞がかかるという固定性」に鑑みると、枕詞には、まだ文字がなかった古代歌謡の時代(もしくは口誦・唱和の時代)に、「特定の枕詞」を謡い始めることで、次に続く歌詞の内容を予知させる働き、インデックスとしての役割が課せられているように思われる。

あしひきの やまのしづくに いもまつと われたちぬれぬ やまの
しづくに(巻二・相聞・一〇七・大津皇子)

ぬばたまの よぎりはたちぬ ころもでを たかやのうへに たなび
くまでに(巻九・雑歌・一七一〇・舎人皇子)

ふぢしろの みさかをこゆと しろたへの わがころもでは ぬれに
けるかも(巻九・雑歌・一六七九・人麿歌集から)

ひさかたの あめみるごとく あふぎみし みこのみかどの あれま
くをしも(巻二・挽歌・一六八・柿本朝臣人麿)

くさまくら たびゆくきみと しらませば きしのはにふに にほは
さましを(巻一・雑歌・六九・清江娘子)

(二) 序詞の類歌

「はじめに」の(三)②で述べたように、序詞は、「七音以上の長さで、作者の独創による詞句である点が枕詞と異なる」ものの、修辞上の働きは同じとすると、少なくとも、①初句、第三句単独では序詞として成立できない、②作者の独創による詞句とすると、枕詞がもつ固定性がなく、枕詞ほど人口に膾炙され難いことも指摘できる。

はるくさを うま くひやまゆ こえくなる かりのつかひは やど
りすぐなり(巻九・雑歌・一七二・人麿歌集から)

*初句五音から第二句「うま(馬)」までが序詞。句割れするが、「くひやま(昨山)」を起こす。

かはのへの いつものはなの いつもいつも きませわがせこときじけ
めやも(巻四・相聞・四九四・吹茨刀自)

*上二句が序詞。「いつも(巖藻)」とは、繁茂した藻のこと。第三句の同音を含む「いつもいつも」を起こす。

あきやまの このしたがくり ゆくみづの われこそまさめ おも
ほすよりは(巻二・相聞・九二・鏡王女)

*上三句が序詞。「ゆくみづの…ます(行く水の…増す)」の同音を含む「われこそまさめ(我こそ増さめ)」を起こす。

なぐさむる こころはなしに くもがくり なきゆくどりの

ねのみしなかけ(巻五・雑歌・九〇三・山上憶良)

*「くもがくり(雲隠り)」以下二句が序詞。結句「ねのみしなかけ(音のみし泣かけ)」を起こす。

(三) 枕詞を含んで構成される序詞

枕詞

いそのかみ ふるのやまなる すぎむらの おもひすぐべき

序詞

きみにあらなくに(巻三・挽歌・四二五・丹生王)

*初句五音「いそのかみ(石の上)」は地名「ふる(布留)」にかかる枕詞。これを含む上三句が序詞。「すぎむら(杉群)」の「すぎ(杉)」の同音を含む「おもひすぐ(思ひ過ぐ)」を起こす。

類歌で見る限り、①初句五音の枕詞には第二句を、三句五音のそれには第四句をそれぞれつなぐ働き(つなぎ目)があり、文の終わりを示す句切れとりわけ初句切れ、三句切れとは真逆の関係にあることは明らかだが、前者が後者を抑制する働きの有無については統計的な分析を必要とする。また、②序詞については、それが起こす詞句との連続性は証明できても、句切れとの相関は分明でない。

二 万葉和歌(短歌)における句の切れ続き

そこで詠歌年代が明らかでない万葉和歌(短歌)二〇九五首について、句の切れ続きに影響する表現技法として、①句切れ、②枕詞・序詞の実態と技法間の関わり具合の統計的分析を試みることにした。

(一) 句の切れ——句切れ

「句の切れ」とは、「はじめに」(四)で述べたように、複数の文からなる和歌(短歌)において、結句以外の何句目で文が終わっているかを示す切れ目のことであり、句切れと同義である。万葉和歌(短歌)においては、句切れが初句から第四句までのいずれかの句に用いられた頻度は八三五回、句切れの位置別では二句切れが最も多く三六五回で全体の四四%、次いで四句切れが三六一回・四三%、三句切れが九〇回・一一%、第四位は初句切れで一九回・二%であった。句切れ歌と無句切れ歌の割合は七七〇首対一三二五首、全体の三七%対六三%であった。句切れ歌七七〇首に八三五回の句切れがあった、ということは、一首の中に複数回の句切れがあり得ることを意味する。

二句切れ

四句切れ

きみがゆき けながくなりぬ やまたづね むかへかゆかむ まちに

かまたむ(巻二・相聞・八五・磐姫皇后)

二句切れ 三句切れ

おくららはいまはまからむ こなくらむ それそのははも わをまつらむぞ(巻三・雑歌・三四〇・山上憶良臣)

初句切れ 二句切れ

いざこども(ヨ) たはわざなせそ あめつちの かためしくにぞや
まとしまねは(巻二〇・四五一一・藤原仲麻呂)

このように、万葉和歌(短歌)における文の終わり方が、頻度はともかくある程度弾力的であったにもかかわらず、二句切れ、四句切れが圧倒的に多数を占め、逆に、初句切れ、三句切れが少数に過ぎなかったほんとうの理由を探ることとしたい。

(二) 句の続き——枕詞・序詞・その他

前記(一)で述べたように、万葉和歌(短歌)で文の終わり方に第二句末、第四句末が多く、初句末、第三句末が少ないという偏りが存在することは、句の切れ続きを制御する表現方法の存在例えば一方の技法が他方のその制約条件となつている、などを推測せしめる。

① 枕詞

初句五音、三句五音に限定して用いられる枕詞は、直後の特定語句に「かかる」ことによつて、初句切れ、三句切れの多用を抑える働きとした、と見られる。

別表のとおり、句切れ歌七七〇首にも多くの句の続き(つなぎ目)

が残存し、無句切れ歌一三二五首のつなぎ目とを合算すると七五四回となる。万葉和歌(短歌)における句の切れ目とつなぎ目を対比すると、前者八三五回対後七五四回、全体の一〇%対九〇%の比率となる。この辺りの状況を、松田武夫氏は、「いつたいに、和歌の一般的なあり方としては、自然のままの順序どおりに、句切れなしに表現することであろう。無句切れの歌が和歌・短歌を通じて数が多いということは、和歌・短歌の一般的通有性のさながらな表れ」(注3)、と言っている。

万葉和歌(短歌)に用いられた枕詞四七三回、枕詞を含む和歌(短歌)四五八首と差があるのは、句切れと同様、一首中に複数回の枕詞が用いられた場合があることを意味する。

あかねさす ひはてらせれど ぬばたまの よわたるつきの かくら
くをしも(巻二・挽歌・一六九・柿本朝臣人麿)

たまもかる みぬめをすぎて なつくさの のしまのさきに ふねち
かづきぬ(巻三・雑歌・二五一・柿本朝臣人麿)

あしひきの やまにおひたる すがのねの ねもころみまく ほしき
きみかも(巻四・相聞・五八三・余明軍)

② 序詞

序詞が七音以上の長さを必要とすると、初句と第三句はそれだ

けでは序詞として機能することは不可能であって、次句または前句の一部または全部を取り込まずには序詞を構成できない。また、第四句七音もそれが起こす詞句を含む文が結句の七音だけでは文を構成することは難しい。

きみがいへに わが すみさかの いへちをも われはわすれじいのち
しなずは(巻四・相聞・五〇七・柿本朝臣人麿妻)

*初句「きみがいへに(君が家に)」に第二句「わがすみさかの(我が住坂の)」の「わが」まで句割り結び、序詞として「すみさかの(住坂の)」を起こす。

あらたしき としのはじめの はつはるの けふるゆきの

いやしけよ(と)(巻二〇・四五四〇・大伴宿祢家持)

*第四句までが実景(正月の大雪は豊年の瑞兆とされた。)を写した序詞。結句の「いやしけ」を起こす。「いやしけよ(と)いや重ね吉事」は「一層重ナレ、吉キコトガ。」の意。

別表のとおり、①初句と第二句とをつなぐ(第二句内の詞句を起こす)序詞は五回・全体の三%、②第四句と結句をつなぐ(結句または結句内の詞句を起こす)序詞は一〇回・全体の七%、合計一五回・全体のわずか一〇%を占めるに過ぎず、初句切れ、四句切れを抑える効果は殆ど認められない。その多くは、第二句と第

三句をつなぐ(第三句または第三句内の詞句を起こす)序詞六四回・全体の四二%、第三句と第四句をつなぐ(第四句または第四句内の詞句)を起こす序詞七四回・全体の四八%と、それぞれ半数近くを占めるが、前者は二句切れを、後者は三句切れを抑えるには、序詞という表現技法単独では力量不足である。

万葉和歌(短歌)に用いられた序詞一五三回、序詞を含む和歌(短歌)が一五九首と、句切れや枕詞と逆の差があるのは、その序詞の続き(つなぎ目)が枕詞として既に評価済みであることの資料上の整理である。

序詞① 枕詞

をとめらがそで ふるやまのみづがきの ひさしきときゆ

序詞②

おもひきわれは(巻四・相聞・五〇四・柿本朝臣人麿)

枕詞

おくやまの いはかげにおふる すがのねの ねもころわれは

序詞

あひおもはずあれや(巻四・相聞・七九四・藤原朝臣久須磨)

③ 枕詞・序詞

別表のとおり、初句五音の枕詞三三〇回・全体の七〇%はそれだけで初句切れを抑える効果があるが、第三句五音の枕詞一四三

回・全体の三〇%はそれだけでは三句切れを抑える効果は不足気味である。序詞七四回・全体の四八%が加わって漸く三句切れ九〇回・全体の一一%に止まり得たのである。和歌(短歌)における句の切れ続きのうち、とりわけ枕詞・序詞と句切れとは、一方が他方を抑止する関係すなわち負の相関関係にあることが明らかになった。このことは、①残存する大多数の句の続き(つなぎ目)六九一九回・全体の八三%が句切れ・枕詞・序詞以外の技法(文法的構造といつてもよい。)により句が続いていることを示すと同時に、②いづれの句間も句間平均(一七三〇回・構成比①二五%、同②)残存率(八三%)にほぼ収れんすることが確認された。さらに、③『古今和歌集』において三句切れが増えることは、とりわけ、三句五音の枕詞、上の句までの序詞の減少を予測せしめる。

三 万葉和歌(短歌)の枕詞・序詞から古今和歌(短歌)の掛詞・縁語への転換(展望)

先行研究によれば、「万葉集の枕詞のうち、「あしひきの」「あづさゆみ」「いそのかみ」「しろたへの」「ちはやぶる」「ひさかたの」は、古今集でも多く用いられているが、わりあい「読人しらず」の歌に多い。「読人しらず」の歌に多いことは、万葉集における枕詞の精神がそのまま読人しらずの歌人達に継承されているということである。「古今集と万葉集とでは枕詞に大きな変化が見出される。人名・地名・神名にかかる枕詞が急激に減少もしくは消滅し、それに

代わって普通名詞が古今集に多い」とし、「枕詞は元来うたうこと
によってその枕詞が生き生きとした感動を呼ぶものであり、平安時
代におけるかなの普及による記載文学と化した和歌の技巧は視覚
を通しての技巧つまり掛詞・縁語・余情表現に移るものもうなずけ
る。」と言っている。「枕詞は万葉集にのみ生き生きとよまれたといっ
ても過言ではあるまい。」(以上注 4)、としている。

たしかに、万葉和歌(短歌)の枕詞・序詞にあつては、指摘どおり、
「謡うことによつて生き生きとした感動を呼び」起こす表現であり
ながら、その大多数は比喩など語義によるものであり、語音(同音
繰り返し)によるものは比較的少数に過ぎない。古今和歌(短歌)
における枕詞・序詞の使用の低調化及びその延長上に発達したと
見られる掛詞・縁語への転換とを見透すと、万葉和歌(短歌)の枕
詞・序詞にかかる特定語句(独創による詞句)の「語音・語義(同音
異義)による文脈の二重化」にこそ注目すべきであろう。

(一) 枕詞にかかる特定語句の同音異義

たまきはる うちのおほのに うまなめて あさふますらむ
そのくさふかの(巻一・雑歌・四・中皇子(舒明天皇皇女の間人皇
后か)

*「たま」は靈魂、「きはる」は極まるの意で、「命」「うち」などに
かかる枕詞。この歌では、同音を含む地名「宇智」にかかる。

わがせこは いづくくらむ おきつもの なばりのやまと けふか
こゆらむ(巻一・雑歌・四三・当麻真人磨妻)

* 沖つ藻が海中に隠れていることから、「なばる(隠る)」の連用形
「隠り」と同音を含む地名「名張」にかかる。

わがせこを あがまつばらよ みわたせば あまをとめども
たまもかるみゆ(巻一七・三九一二・三野連石守)

* 「わが背子」と「あが待つ」から同音を含む地名「あがまつばら
(安我松原)」にかかる。広島県呉市阿賀あたりか。

いもがいへに いくりのもりの ふじのはな いまこむはるも
つねかくしみむ(巻一七・三九七四・高安王)

* 妹が家にわが「行く」と同音を含む地名「伊久里」にかかる。
(二) 序詞が起こす詞句の同音異義

おほなごを をちかたのへに かるかやの つかのあひだも
われわすれめや(巻二・相聞・一一〇・日並皇子)

* 「かるかや(刈る草)」の一握りの意で、「つか(束)」にかかる。同
音を含む「つかのあいだ(束の間)」にもかかる。

わたのそこ おきつしらなみ たつたやま いつかこえなむ
いもがあたりみむ(巻一・雑歌・八三・古歌か)

*「しらなみ(白浪)」が「立つ」と、同音を含む地名「たつたやま(龍田山)」にもかかる。

このように、枕詞がかかる特定語句や序詞が起す独創的な詞句による語義は掛詞風に二重になるが、文脈までもが二重になるわけではない。

(三) 万葉和歌(短歌)における掛詞・縁語の初出歌または類歌

掛詞(かけことば)は、

「同音異義の二語を重ね用いる技法。同音異義語の一方は自然の景物を、もう一方は人間の心情や状態を表すことが多く、その自然の景物によって心情や状態を具体的なイメージとして形づくる。縁語とともに『古今和歌集』の時代から発達した。」

他方、縁語は、

「意味的に関連の深い語群を意識的に読みこむことで、明確なイメージを創り出す技法。一首の中で、掛詞とともに用いられることも多い。」(注2)、とされるが、万葉和歌(短歌)にも、少数ながら、これらの初出歌ないし類歌と認められるものがある。

① 掛詞の初出歌・類歌

いなといへど しふるしひのが しひがたり このころきかずて あれ
こひにけり(巻三・雑歌・二三七・持統天皇か)

*固定性をもつ枕詞(この歌の場合は初句五音)を失った同音異義の表現形式。媼の人名「しひ(志斐)」と「しひがたり(強い語り)」の「しひ(強ひ)」を懸ける同音異義の掛詞。

わぎもこを ゆきてはやみむ あはぢしま くもゐにみえぬ いへづ
くらしも(巻一五・三七四二・作者未詳)

*見ルは逢フと同義。「みむ(見む)→あふ(逢ふ)→あはじしま(淡路島)」の異音同義の掛詞。

まつのはな はなかずにしも わがせこが おもへらなくに もとな
さきつつ(巻一七・三九六四・平群氏女郎)

*「松の花のようにお帰りを待つ私を」の意で「まつ(松)」に「待つ」を懸ける同音異義の掛詞。

かすがのに あはまけりせば ししまちに つぎてゆかましを やし
ろしうらめし(巻三・譬喩歌・四〇八・佐伯宿禰赤磨)

*「あはまく(粟蒔く)」に「逢はまく」を懸ける同音異義の掛詞。
おもひやる すべのしらねば かたもひの そこにぞあれば こひな

りにける(巻四・相聞・七一〇・栗田女娘子)

*「かたもひ(片坑・蓋なしの浅い椀のこと。)」と「片思い」を懸ける同音異義の掛詞。

② 縁語の初出歌

とよくにの かはるはわぎへ ひものこに いつがりをれば かはるは
縁語

わぎへ(巻九・相聞・一七七一・抜気大首)

*「いつがりをれば」の「い」は接頭語。「つながる」「男女が体を接触させる」の意。「ひも(紐)」の縁語。

③ 掛詞・縁語の初出歌

掛詞 縁語

へそかたの はやしのさきの さのはりの きぬにつくなす めにつく
わがせ(巻一・雑歌・一九・井戸王か)

*「さのはり(さ野榛)」の「さ」は接頭語。「野に生えている榛(はんの木)」の意。「はり(榛)」は同音異義の「針」の掛詞。「きぬ(衣)」は「針」の縁語。

これまで見てきたように、掛詞・縁語が枕詞・序詞と相異なる点は、両者ともに同音異義による表現技法ではあっても、①枕詞の場合、その枕詞がかかる特定語句の同音異義であり、②序詞の場合も、その序詞が起こす詞句の同音異義であって、掛詞・縁語にはそのような限定はない。

おわりに

(一) 句切れと枕詞・序詞とは負の相関関係にある

繰り返しになるが、万葉和歌(短歌)における句切れと枕詞・序詞との相関関係を探る試みは、興味深い結果にたどりついた。別表のとおり、万葉和歌(短歌)において、初句切れ・三句切れが二句

切れ・四句切れに比較して少ない理由が、初句五音、三句五音からなる枕詞と直後の句の固定的な特定語句及び七音以上の序詞が起こす独創的な詞句との続き(つなぎ目)にあることが明らかになった。もう少し厳密に言うると、①初句切れは、初句五音の枕詞がかかる特定語句とのつなぎだけで句切れを抑制できたが、②三句切れは三句五音の枕詞がかかる特定語句とのつなぎだけではならず、第三句までの序詞が起こす独創的な詞句によるつなぎの助けを借りて漸く句切れの抑制ができたこと、③序詞の使用頻度が前記②に次いで多い第二句までの序詞が起こす独創的な詞句によるつなぎだけでは二句切れを抑制し難かったという状況に鑑みると、句切れと枕詞・序詞とは、一方が他方の停止条件となる負の相関関係にあることが明らかになったのである。このことは、平安前期に編まれた最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の和歌(短歌)における三句切れの増加は、万葉和歌(短歌)において第三句、第四句のつなぎ目を担保した①三句五音の枕詞の衰退(使用頻度の低下)と、②第四句を起こす第三句までの序詞の衰退(使用頻度の低下)とを予測せしめる。

(二) 掛詞・縁語は、枕詞・序詞の同音異義から発展した

『古今和歌集』の時代に発達したとされる掛詞・縁語という表現技法は、極めて少数ながら、万葉和歌(短歌)にも初出歌、類歌が見られた(前記三(三)参照)。これらを詳細に見ていくと、万葉和歌

(短歌)における枕詞・序詞の多数は「語義によるもの」であり、「語音(同音の繰り返し)によるもの」は極く少数に過ぎない。その中間的位置は、「語義・語音(同音異義)によるもの」が占めている。

前記三(三)で述べたように、掛詞・縁語という表現技法の本来は、「同音異義の二語を重ね用いる」、「意識的に関連の深い語群を詠み込む」ところにあり、その技術的淵源は、枕詞がかかる特定語句の二重性、序詞が起す独創的な詞句の二重性にまで遡及できることがほぼ明らかになった。

以上、万葉和歌(短歌)の句切れと枕詞・序詞との関係性を中心に分析を進めてきたが、これからは、古今和歌(短歌)以降の①句切れの変遷、②枕詞・序詞の衰退、③掛詞・縁語の発達のそれぞれの過程について、改めて統計的検証・推測の機会を得たいと思う。

注1 犬養寛氏ほか編集『和歌大辞典』(昭和61・3・明治書院)・

「和歌」(谷口茂氏)

2 山口堯一・鈴木日出男氏編『全訳全解国語辞典』(平成16・1

0・文英堂)

3 松田武夫氏「修辭法の再検討・句切れ」『月刊文法』(昭和44・

2・明治書院)

4 高田良二氏「修辭法の再検討・枕詞」、三浦和雄氏「同・序詞」

5 テクスト 万葉和歌(短歌)にあつては、『新編国歌大観』(第三

巻・昭和59・3・角川書店)

別表 詠歌年代が明らかな万葉和歌(短歌)における句の切れと続き

句間		句の切れ			句の続き(句のつなぎ目)														参考						
句の区分	つなぎ目の数	句切れ	構成比		句切れ歌の残りのつなぎ目	無句切れ歌のつなぎ目	つなぎ目計	構成比②	枕詞		序詞		枕詞・序詞		その他				句切れ+枕詞・序詞						
			①	②					構成比②	構成比②	構成比①	構成比②	構成比①	構成比②	平均値との偏差①	平均値との偏差②	構成比①	構成比②	平均値との偏差①	平均値との偏差②					
初句・第二句のつなぎ目	2095	19	2	1	751	1325	2076	99	330	16	5	0	335	54	16	1741	25	83	±0	±0	354	24	17	-1	±0
第二句・第三句のつなぎ目	2095	365	44	17	405	1325	1730	83			64	3	64	10	3	1666	24	80	-1	-3	429	29	20	+4	+3
第三句・第四句のつなぎ目	2095	90	11	4	680	1325	2005	96	143	7	74	4	217	35	10	1788	26	85	+1	+2	307	21	15	-4	-2
第四句・結句のつなぎ目	2095	361	43	17	409	1325	1734	83			10	0	10	1	0	1724	25	82	±0	-1	371	26	18	+1	+1
つなぎ目計	8380	835	100	10	2245	5300	7545	90	473	6	153	2	626	100	7	6919	100	83			1461	100	17		
詠歌年代が明らかな万葉和歌(短歌)	2095								(458)		(159)					平均値 1730	25	83			平均値 365	25	17		
句切れ歌	770	(770)																							
無句切れ歌	1325				(1325)																				

浅岡 純朗 (あさおか すみあき)

1937年、神奈川県生まれ。私立桐朋高校卒業、東京都立大学人文学部国文科卒業。1959年、厚生省入省、社会保険庁地方課長を経て1994年に退官。全国国民年金福祉協会連合会、東京都社会保険労務士会常任理事を経て、2004年二松学舎大学大学院博士課程に進学し、2009年後期課程単位取得退学。現在、全日本大学開放推進機構監事、古典和歌研究者。主要論文：「接続詞「て」からみた短歌の文体的変遷に関する考察——万葉短歌から新古今まで」(『生涯学習フォーラム』第4巻第2号、2001年3月)；「修辞法から読み解く和歌史——古典和歌の句切れ続きに関する一考察」(同前誌、第10巻第1・第2合併号、2008年3月)；「社会人から大学院生へ、そして課程を終えて——65歳からの人生」(『UEJジャーナル』第2号(2011年10月)；「和歌(短歌)における句切れとその原因となった表現にかかる最終的考察」(同前誌、第23号、2017年4月)